

Title	<學界展望>中國海事史研究の現況
Author(s)	松浦, 章
Citation	東洋史研究 (1986), 45(2): 352-361
Issue Date	1986-09-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154147
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

學界展望

中國海事史研究の現況

松浦章

一 緒言

二 中國海事史研究の総合的研究

三 中國海事史の個別研究

四 小結

一 緒言

中國海事史という一部門の研究について現在の状況を概観してみたい。中國海事史と言ってもこれまで馴染みの無い研究分野である。

中國は古來より「南船北馬」と呼稱されるように、内陸河川を、また三千キロに渉る沿海を擁し、さらに東シナ海、南シナ海を経て古來より海外に進出していた。

中國において「海事」という語彙は早くも唐代に見える。嶺南に二度も左遷された韓愈が「南海神廟碑」に、「海事」を海全般に關することがらとして使用している。このことから敷衍して、海事史とは海に係わる人間の歴史と言えらるであらう。しかし、中國の歴史において、海上より古く内陸河川による水運等が發展していたから、

當然これらのことも含めて考察する必要がある。

以上のことから、中國海事史とは、中國の船舶・航海・水運・水産等に關する人文・技術の史的研究所という觀點から考察するものであり、本稿においてもこの意味で中國海事史に關する研究を考え、その研究状況について述べてみたい。

從來、中國史を研究する人々の間では、中國海事史という研究分野は認知されてはいなかったようで、既存の工具書類等にもその専門の項目すら無く、本稿で觸れる關係の研究の多くは、經濟・社會等々の分野の中で添えられ論じられていた。

しかし、七九年以降の中國學術界の活潑な活動は、中國海外交通史、航海史研究等の分野にも研究會が創設されるなど、研究の多様化が見られるのである。そこで、これらの状況を鑑みて、現在までの中國海事史研究の状況を把握することも強ち無意味ではあるまいと考え、ここに一文を草する次第である。

二 中國海事史研究の総合的研究

中國海事史研究の分野に包括できる先驅的研究は、桑原隲藏博士の『唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況殊に宋末の提舉市舶西域人 蒲壽庚の事蹟』（岩波書店、一九三五年十二月増訂本、全集第五卷所收、一九六八年十月）である。本書全體は提舉市舶司蒲壽庚の事蹟を詳細に解明されたものであるが、その過程で廣範圍に渉る問題について論述され、海事史に有效な研究視點や資料を提示され、とりわけ市舶司、海外貿易、貿易船等に關して記述された部分は海事史研究の基本的研究と言える。

同時期、桑原博士と市舶司等について論争された藤田豐八博士の

諸研究、特に『東西交渉史の研究 南海篇』（岡書院、一九三二年三月）に收められた「前漢に於ける西南海上交通の記録」、「宋元時代海港としての杭州附上海・膠州」、「支那港灣小史」等は航海・港灣研究上の先驅的なものである。

中國では武埤幹氏が『中國國際貿易史』（商務印書館、一九二七年）を著わし、中國の海外貿易についてまとめられ、さらに侯厚培氏は『中國國際貿易小史』（萬有文庫、一九二九年十月）を發表され、中國の海外貿易に關する政策の面から考察され、市舶司制度、港灣等について小著ながら先驅的業績をあげられている。その他、向達氏の『中西交通史』（中華書局、一九三四年三月）や、馮承鈞氏の『中國南洋交通史』（商務印書館、一九三七年）等にも海事史に關係する論考が收められているが、これらは、近年の中國の研究分野で言うならば中外關係史の範疇に含めるのが最も適當と考えられる。

中國の學界において、中國海事史の分野の先驅的業績と言えるのは、現在上海復旦大學歴史系教授田汝康氏が發表された「十七世紀至十九世紀中葉中國帆船在東南亞洲航運和商業上的地位」（『歷史研究』一九五六年第八期）である。同論文は發表の翌年二月、上海人民出版社より『十七—十九世紀中葉中國帆船在東南亞洲』（一九五七年二月）と改題され刊行されている。同書により目次を左に示すと次のようにある。

- 一、古代的中國帆船
- 二、十七世紀中國帆船在東南亞洲的活動
- 三、被封建政權所束縛的中國帆船業
- 四、華僑在暹羅航運上所作的貢獻

五、中國帆船業發展停滯的原因

六、十九世紀二十年代前後的中國帆船

七、五口通商與中國帆船

八、結語

と八章に分ち、中國帆船が中國海外發展に寄與した點を、帆船の構造から説き起し、帆船の活動地域、帆船を運賃した人間、外國船との競争等の問題について總合的に論究された。

田氏はさらに、「再論十七世紀至十九世紀中葉中國帆船業的發展」（『歷史研究』一九五七年第十二期）を發表された。同論文において、

十六世紀以前中葡帆船製造和駕駛技術的比較

十六世紀以後中歐航業發展的條件

五口通商、對於中國航業的摧殘

として、十六世紀前においては、中國帆船は決して歐州の帆船に劣っていない優秀な帆船であった。しかし、十六世紀以後の外國勢力進出に對處する能力を持ち得なかつた中國帆船は衰退していったとされたのである。

その後、田氏は「十五至十八世紀中國海外貿易發展緩慢的原因」（『新建設』一九六四年八月・九月合刊）においても右の考えを再確認されている。

中國以外での最大の成果はニードム博士の *Science and Civilization in China*, vol. 4, part III: *Engineering & Nautics* の 29 *Nautical Technology*, 1971, Cambridge U.P. である。同書は橋本敬造・松木哲等四氏により『中國の科學と文明』第十一卷航海技術（思索社、一九八一年一月）として翻譯され閱覽に便利であ

る。同書では文獻上の船舶よりその航海技術まで廣範圍に涉つて詳細に論じられ、中國帆船の全體的特質を初めて解明したものと言える。

その後、中國學術界の海事史研究における最大の收穫は次の二つの考古學分野の發掘であらう。

一九七三年、福建省泉州灣で海船が發掘された。その最初の詳細な報告は『文物』一九七五年第十期に掲載され、發掘された海船は宋代のもので、全長三四・五メートルもあったのである。

さらに、一九七四年には廣東省廣州で秦漢時代の造船工場の遺跡が發掘され、『文物』一九七七年第四期に詳細な報告がされるとともに、このような考古學的調査によつて發現された船舶の出現により、中國學術界には海外交通史等の専門研究會が創設される契機になったのである。

文化大革命後の再興された中國學界の海事史研究分野における最初の成果は田汝康氏等主編になる『水運技術詞典——古代水運與木帆船分冊』（人民交通出版社、一九八〇年十月）である。同書は古代水運部分として、

水運史事、古船、水運歷史人物、水運史籍、水運文物、其他と分類され、木帆船部分としては、

一般名詞術語、船型、船體結構、工屬具、航行操作、修造保養、木帆船運輸業社會主義改造

と分類記述され、文獻資料から技術的な面まで廣範圍に涉り簡明に記述され、中國海事史研究には欠かせない工具書である。

最近の臺灣における研究の成果としては、陳光華氏の『中國的交通運輸發展』（中央文物供應社、一九八二年四月）と、王洸氏の

『中華水運史』（臺灣商務印書館、一九八二年四月）がある。前者は、陸上・水上等の交通運輸について述べるなかで、海上・河川航路、船舶、航海術等にも論述し、後者はこの分野の勞作であるが、主に論じられているのは、近代以後の中國の水運關係である。

三 中國海事史の個別研究

本節では船舶・航海・水運・水産等についての個別研究の状況について述べてみたい。

(一) 船舶

船舶の史的研究は、古代より木造船の造船方法について凌純聲氏の『中國遠古與太平洋兩洋的帆筏戈船方舟和樓船的研究』（一九七〇年）が概括的に把握できる。

船舶に關しては方輯氏の「明代的海運和造船工業」（『文史哲』一九五七年第五期）が最初の研究と言えるであらう。明代私營の造船所は明代の工業部門の一つとして大いに發展したことを指摘されたのである。

他方、包遵彭氏が『鄭和下西洋之寶船考』（臺灣、一九六一年）と『漢代樓船考』（臺灣、一九六七年）の兩書によつて、寶船と樓船の文獻的研究を進められた。

その後、船舶についての本格的な研究は、周世德氏によつて始まったと言える。

周氏は「從寶船歷舵杆的鑒定推論鄭和寶船」（『文物』一九六二年第三期）を發表し、鄭和の寶船の規模を一九五七年に發現された舵杆から推論されたものである。そして、劃期的な研究は同氏の「中

國沙船考略』（『科學史集刊』第五期、一九六三年四月）である。江南沙船の構造上の問題並びにその歴史を文獻のみならず、技術的に解明されたもので、江南沙船の海事史上の位置づけが始めて明らかになったのである。

周氏は「先進的我國古代造船技術」（『文物』一九七八年第一期）で造船史の概観を述べ、さらに「中國造船史上の幾箇問題」（『自然科學史研究』第二卷第一期、一九八三年）において、中國の木造船の發展を四期に區分され、その時期は、

船舶創始期……新石器時代

船舶技術成熟期……秦漢—三國時代

船舶技術高度發展期……宋元—明中葉以前

船舶技術緩慢發展期……明中葉以後

とされている。この分期についても今後さらに論議される必要がある。

周世德氏を初めとして、中國四大海船には沙船・鳥船・福船・廣船をあげられるが、この内の沙船のみ周氏によって構造・文獻上の研究がされたのみで、他の鳥船等の三船型については研究が進んでいない。僅かに鳥船について拙稿があるのみである。その理由は文獻的資料が極めて少ないことに起因するためであろう。

しかし、中國域外に残された中國帆船の圖は少數ながら知られ、既に大庭脩氏によって紹介されている。對日貿易船に使用された船舶が中國商船であったという認識が學界にまだ十分に認識されていないと言えるであろう。

中國の海船・川船を含め多角的に調査されたのは Worcester 氏で、中國海關に勤務していた時の経験により中國船舶研究に多くの

成果をあげられ、特に長江航行の船舶を知る上で唯一の詳細な資料を提供している。

河川航行の船舶については、宋代の商船についての斯波義信氏⁽¹⁰⁾、明清時代の漕運に使用された船舶についての星城夫氏等の文獻的研究があるのみで、一九四五年前において大陸で調査された邦人の調査資料も今日では重要な資料となっている。

(二) 航海

航海に關係する研究は、中國での分類は一般に中外關係史として分類されている。

この分野では田汝康氏の上述の研究が先驅的なものである。

ついで、向達氏が校注された『兩種海道針經』（中外交通史叢刊、一九六一年九月）が出版され、イギリス、ケンブリッジ大學ボールドライン圖書館所藏の「順風相送」、「指南正法」の兩鈔本を翻刻し、各々を十六世紀、十八世紀初期に成立した海道針經とされた。兩針經により明・清時代に中國船が廣範圍に海外へ航海していたことが知られるのである。

さらに、向達氏は『武備志』卷二四一に收められた「自寶船開船從龍江關出水直抵外國諸番圖」を『鄭和航海圖』（中外交通史叢刊、一九六一年九月）として出版され、詳細な地名索引を附された。臺灣の徐玉虎氏はさらにこの圖をもとに、航海術・針路等について詳細に研究されて、『明代鄭和航海圖之研究』（臺灣學生書局、一九七六年七月）を出版された。徐氏は鄭和遠征等に關しては『明鄭和之研究』（德馨室出版社、一九八〇年六月）をまとめられている。

鄭和關係については既に、鄭鶴聲氏が『鄭和遺事滙編』（中華書局、一九四八年）を發表し、その後、鄭一鈞氏と共編の『鄭和下西洋資料滙編』上册（齊魯書社、一九八〇年十月）、中册上・下が刊行され、上册第四章では「鄭和使團的航海技術」として、鄭和遠征時の航海術・航路等について述べられている。

特に一九八五年六月には紀念偉大航海家鄭和下西洋五八〇周年籌備委員會及び中國航海史研究會によって、『鄭和家世資料』、『鄭和下西洋』、『鄭和研究資料選編』、『鄭和下西洋論文集』（以下四點、人民交通出版社刊）及び同二集（南京大學出版社）が刊行され、鄭和の航海のみならず、鄭和の家系等にまで及び、特に『鄭和下西洋』は鄭和關係の研究文獻目録が付され、『選編』以下の三冊は論文集で、『選編』には「八十年國內外關於鄭和研究的論著目録」を附し、先の目録より詳細である。『論文集』（第一集）は論文集でありながら、次の項目に沿って分類されている。

鄭和下西洋の目的

對鄭和寶船の探討

鄭和船隊の航行區域

鄭和船隊の航海技術

鄭和對世界航海事業的貢獻及其在福建的活動

とあるように、中國學界の鄭和の航海に關する學問的傾向の一端が知られる。これらの關係書の出版により我が國の鄭和に關する研究⁽¹³⁾を量的には完全に凌駕することになった。

鄭和時代を離れるとその研究は少なく、韋巽氏の『古航海圖考釋』（海洋出版社、一九八〇年三月）の航海圖に關するものや、田

汝康氏の『渡海方程』⁽¹⁴⁾という水路簿に關する研究が知られる程度である。

以上のような缺を補なう意味で聶寶璋氏の『中國近代航運史資料』第一輯上・下册（上海人民出版社、一九八三年十一月）は注目に値する。同書、上册、緒編 第二章「鴉片戰爭前中國木船運輸業概況」において、近代以前の中國帆船の航運に關する資料を蒐集されていることである。しかし、古典資料は少なく、掲載資料に幾篇かの研究書からの引用を資料として收載されている點に問題が残る。つまり、鄭和時代の航海を離れると資料が極めて少ないためで、それ故、拙稿では中國域外に關係資料を求めている。

清代の沿海航運については、杜黎、蕭國亮、郭松義氏等の論考があり、前二氏のは主に上海沙船の活動に關するもので、中國沿海全域に及んだものとしては郭氏のものが最初である。わが國では、香坂昌紀氏、森田明氏及び拙稿と最近宮田道昭氏の論考⁽¹⁵⁾がある。

これまで、航海に關しては海外へのそれについては注目されていたが、こと沿海の場合には注意されていなかった。今後、上記の研究を契機に新たな研究がおこなわれるものと考えられる。

(三) 水運

大陸全域に廣大に擴がる水路航行に關する研究はまだ十分におこなわれていないと言って良いであらう。商品の流通等の問題に關係して觸れられることがあっても、水運關係の研究は一部河川等について幾篇かの研究が知られるのみである。

黄河については今堀誠二氏の「清代以後における黄河の水運について」（『史學研究』第七二、一九五九年）があり、長江については

董崇實氏の「揚子江水運之研究」(『中法大學月刊』第六卷一號、一九三三年十一月)がある。同論文は清末以降の長江航行問題に重點がおかれている。大運河に關しては星斌夫氏の研究があり、その他の水運では、中山久四郎氏の「廣東の商胡及び廣東長安を連絡する水路舟運の交通」(『東洋學報』第十卷二號、一九二〇年)や黃盛璋氏の「歴史的渭河水運」(『西北大學學報』一九五八年第二期、同氏「歴史地理論集」人民出版社、一九八二年六月)等が知られるのみで、十分な研究が進んでいないと言える。

しかし、一九四五年前において中國を實地調査された報告書が、河川の水運についての考察に示唆を與えてくれる。その最大の成果が滿鐵調査部編の『支支の民船業—蘇州民船實態調査報告—』(博文館、一九四三年三月)であろう。同書は、内河民船の構造、勞働、所有關係、經營、商品流通事情、航行等について多角的に調査されたものである。附録として「實態調査基本諸表」が別冊になっており、民船經營・航運狀況を知る上で貴重である。同時期のものとして『黃浦江上戎克民船生活者ノ醫學的調査』(上海厚生醫學專科學校、一九四三年三月)があり上海厚生醫學專科學校と中支戎克協會の共同調査になるもので、二百十八隻の船舶の調査と、一、〇七五人に及んだ醫學的調査から成っている。

この他、沿海・河川の航運を中國全般に涉つて調査したものに『支那の航運』(東亞海運株式會社、一九四三年十月)がある。

さらに個別的調査報告には、芝池靖夫・手島正毅兩氏の「中支に於ける民船の經營」(『滿鐵調査月報』第二十二卷三號、一九四二年三月)、手島・新居芳郎兩氏の「中支に於ける民船の勞働に就いて」(同二十二卷四號、一九四二年四月)、堀内清雄氏の「青島を中

心とする戎克貿易事情」(同二十二卷九號、一九四二年九月)、同氏「青島に於ける船行事情」上、下(同二十二卷十一、十二號、一九四二年十一月、十二月)がある。

また華北航業總會より刊行されていた『華北航業』にも中村義雄氏「船行に就いて」(一)~(四)(同五、六、七、八號、一九四一年二、三、四、五、六月)、添田邦雄氏「蘇北に於ける民船業に就て」(同六號)、中村氏「華北に於ける内河水運」(同八號)、水野邦雄氏「中支に於ける民船業に就て」(同十一號、一九四一年九月)、同氏「北支に於ける民船の概要」(同十七號、一九四二年四月)、同氏「黃花洋向漁船と船行」(同二十號、一九四二年七月・八月)等々があり參考となろう。さらに『支那省別全誌』(一九一八~二〇年)も内陸河川の水運・船舶を知るためには必要である。戦後、實地調査をもとにまとめられた上坂西三氏の『中國交易機構の研究』(早稻田大學出版部、一九四九年十月)は民船研究には缺くことが出来ない。

四 水産

水産關係の研究は、これまで李士豪・屈若華兩氏の『中國漁業史』(商務印書館、一九三七年四月)が流布した唯一の概説書であった。最近海上に限定される張震東・楊金森兩氏編著の『中國海洋漁業簡史』(海洋出版社、一九八三年四月)が出版され前者以來の空白を埋めることになったが、兩者共に、近代前の水産に關しては記述が極めて少ない。

水産關係の個別研究も極めて少ないが、我が國では、渡部武氏の「漢代の畫像に見える漁撈と採集」(『海事史研究』第三十六號、一

九八一年四月)、中村治兵衛氏の「唐代の漁業政策と魚類の流通——唐代漁業史の前置——」(『中央大學文學部紀要』第七十六、一九七五年三月)、同氏「唐代の漁法と漁具——唐代漁業史の後章——」(『鈴木俊先生古稀記念東洋史論叢』、一九七五年四月)や、姫田光義氏の「中國近代漁業史の一斷」(『近代中國農村社會史研究』一九六七年)が知られる。臺灣の漁業については曹永和氏や中村孝志氏等の研究が知られるのみで、水産關係の分野は中國史の中でも最も遅れている分野と言える。

(四) その他

水上航路の分歧點となる港灣都市や河川の埠頭と言うべき船舶停泊地等やその機能に關する研究も中國海事史研究に當然含まねばならない。一部我が國でも行なわれているが、まだ十分とまで言える研究量では無い。

中國では沿海港灣について黃成璋氏の「中國港市之發展」(『地理學報』一九五一年第一・二期合刊、前掲書所收)がある程度であったが、近年『海交史研究』の發刊によって林士民氏の「古代的港口城市——寧波——」、袁元龍・洪可曉兩氏の「寧波港考略」(同三期、一九八一年)、陳自強氏「論明代漳州月港的歷史地位」(同五期、一九八三年)等の研究が見られるようになった。

さらに、近代前の海關制度も海事史研究には重要と考えられるが、これまで寺田隆信氏の「清朝の海關行政について」(『史林』第四十九卷二號、一九六六年三月)が唯一であり、河川内關について香坂昌紀氏の「清代浙甯關の研究」一、二(『東北學院大學論集 歷史・地理學』第三、五號、一九七二年十二月、一九七五年三月)

が知られるのみであったが、最近中國では、吳建雍氏の「清前期權關及其管理制度」(『中國史研究』一九八四年第一期)や彭澤益氏の「清初四權關地點和貿易的考察」(『社會科學戰線』一九八四年第三期)と言った研究も見られ、今後多様化して來るものと思われる。

四 小 結

中國海事史研究の現況として、主に船舶・航海・水運・水産等々の項目に分かつて述べて來たが、本稿で觸れた研究は筆者の關心から明清時代の木造船舶に關して、その航運に關する研究の動向に限られた。まだ本稿に取り上げねばならない研究が多く逸脱していることと思われるため、諸賢の御教示を請う次第である。

しかし、中國海事史研究という視點から見た時、少なくとも近代前の、中國悠久の歴史の中で主に經濟活動等に活躍した中國帆船に關する主要な研究については述べたと考えられる。以上の研究動向を通じて言えることは、その活躍に比して研究は十分進んでいなかったと言えるであろう。

その主たる要因は、他の研究分野に比して資料が極めて少ないことにより、あるいは存在していても極く限られた叢書等に見られるもので、今後公刊の機會が得られればさらに、研究が進展する分野も豫想される。

註

(1) 『五百家注昌黎文集』卷三十一、碑(四庫全書珍本四集、集部所收)。

(2) 我が國では日本海事史學會という研究組織があり、『海事

史研究』という研究會誌が發刊され、その研究目的を参照した(『海事史研究』第二號、一九六四年七月、『日本海事史學會々則』)。

- (3) 中國海外交通史研究會(一九七九年三月成立、『中國歷史學年鑑』一九八一年、四三七頁による)、中外關係史學會(一九八一年五月成立、『中國歷史學年鑑』一九八二年、五二五～五二六頁による)、中國航海史研究會(一九八二年四月末、廈門で開催し、『中國航海史』の編纂を決定す、『中國歷史年鑑』一九八三年、三〇五～三〇六頁による)。

- (4) 饒宗頤氏の「説鵠及海船の相關問題」(『中央研究院民族學研究所集刊』第三十三冊、一九七三年四月)も参考になる。

- (5) 同時期の研究に、馮漢鏞氏の「唐宋時代的造船業」(『歷史教學』一九五七年、十期)がある。

- (6) 周世德氏「中國沙船考略」三四頁。沙船について我が國では、上野康貴氏の「清代江蘇の沙船について」(鈴木俊教授還曆記念東洋史論叢)、大安 一九六四年)がある。

- (7) 松浦章「日清貿易における長崎來航唐船について——清代鳥船を中心に——」(『史泉』第四十七號、一九七三年九月)同「清代鳥船と『長崎版畫』」(『關西大學考古學等資料室紀要』第二號、一九八五年三月)。

- (8) 大庭脩氏『江戸時代における中國文化受容の研究』(同朋舎、一九八四年六月)。

- (9) G. R. G. Worcester, *Sail and Sweep in China*, Science Museum, London, 1966. Worcester, *The Junks & Sails of The Yangtze*, Naval Institute Press, Maryland,

1971, Third Printing, 1983.

- (10) 斯波義信氏『宋代商業史研究』(風間書房、一九六八年二月)。

- (11) 星斌夫氏『大運河——中國の漕運——』(近藤出版社、一九七一年一月)、同氏『明清時代交通史の研究』(山川出版社、一九七一年三月)。

- (12) 後述一七一頁参照。

- (13) 我が國の鄭和關係研究として、船舶、航海については、山本達郎氏「鄭和の西征」(『東洋學報』二十一卷三、四期、一九三四年)、橋本敬造氏「鄭和の航海」(『東方學報』(京都)第三十九冊、一九六八年三月)、家島彦一氏「十五世紀におけるインド洋通商史の一齣——鄭和遠征分隊のイエメン訪問について——」(『アジア・アフリカ言語文化研究』第八號、一九七四年。同論文は「鄭和分隊訪問也門」(『中外關係史譯叢』第二輯、一九八五年七月)と中國語譯されている)、『寺田隆信氏鄭和——中國とイスラム世界を結んだ航海者——』(清水書院、一九八一年八月)等々がある。

- (14) T'ien Ju-Kang, "The First Printed Chinese Rutter—Duhai Fangcheng 渡海方程", *T'oung Pao* LXVIII, 1—3, 1982. 田汝康氏『渡海方程』——中國第一本刻印的水路簿(Explorations in The History of Science and Technology in China, Shanghai Chinese Classics Publishing House, 1982. 所收)。

- (15) 松浦「中國商船の航海日誌——咸豐元年(一八五二)長崎來航「豐利船」日記備查』(『關西大學東西學

術研究所創立三十周年記念論文集」一九八一年十二月、同、馮佐哲氏譯、呂昶氏校「中國商船の航海日誌——關於咸豐元年（一八五二）來航長崎的豐利船《日記備查》」（杜文凱氏編『清代西人見聞錄』中國人民大學出版社、一九八五年一月所收）。松浦「李朝時代における漂着中國船の一資料——顯宗八年（一六六七）の明船漂着と「漂人問題」を中心に——」（『關西大學東西學術研究所紀要』第十五輯、一九八二年三月）。

- (16) 杜黎氏「鴉片戰爭前上海航運業的發展」（『學術月刊』第八十八期、一九六四年四月）。蕭國亮氏「沙船貿易的發展與上海商業的繁榮」（『社會科學』一九八一年第四期）。同氏「外國資本入侵與上海沙船業的衰落」（『社會科學』一九八三年第一期）。同氏「清代上海沙船業資本主義萌芽的歷史考察」（『中國資本主義萌芽問題論文集』、江蘇人民出版社、一九八三年四月）。郭松義氏「清代國內的海運貿易」（『清史論叢』第四輯、一九八二年、十二月）。

- (17) 香坂昌紀氏「清代前期の沿岸貿易に關する一考察——特に雍正年間・福建——天津間に行われていたものについて——」（『文化』三十五卷一・二號、一九七一年十二月）。森田明氏「清代臺灣における鹿港鎮の交易機能」（『東洋史論』四號、一九八二年九月）。松浦「清代における沿岸貿易について——帆船と商品流通——」（小野和子氏編『明清時代の政治と社會』、一九八三年三月）、同「清代江南船商と沿海航運」（『關西大學文學論集』第三十四卷三・四號、一九八五年三月）。宮田道昭氏「十九世紀後半期、中國沿岸部の市場構造——

「半殖民地化」に關する一視點——」（『歷史學研究』第五〇號、一九八六年一月）。以上は交易を主とするものであるが、沿海を海上交通路として使用した一例として、松浦「清代における山東・盛京間の海上交通について」（『東方學』第七十輯、一九八五年七月）があり、沿海航行船の具體的資料には、松浦「李朝漂着中國帆船の「問情別單」について」上・下（『關西大學東西學術研究所紀要』第十七、十八輯、一九八四年三月、一九八五年三月）、同「清末上海沙船の朝鮮漂着に關する一資料」（『關西大學東西學術研究所所報』第四十二號、一九八五年十二月）等がある。

- (18) 福田英雄氏編『華北の交通史——華北交通株式會社創立史小史——』（TBSブリタニカ、一九八三年一月）にも河北・山東兩省を中心とする水運關係の記述が見られる。

- (19) 曹永和氏『臺灣早期歷史研究』（聯經出版、一九七九年七月）。中村孝志氏「南部臺灣の鯔漁業について」（『天理大學學報』五卷一號、一九五三年）。中村氏「南部臺灣鯔漁業再論」（『南方文化』第十一輯、一九八四年十一月）。

- (20) 斯波義信氏「中國中世の商業」（『中世史講座 第三卷 中世の都市』學生社、一九八二年八月）参照。

- (21) 對外貿易史の面から中國の海港都市については、傅衣凌氏等合著『福建對外貿易史研究』（一九四八年）（同書には拙稿「福建對外貿易史研究」について」（『東方』第六十號、一九八六年三月）という紹介がある）、陳高華・吳泰兩氏『宋元時期的海外貿易』（天津人民出版社、一九八一年九月）や、李康華、夏秀瑞、顧若增氏編著『對外貿易史簡論』（對外貿

易出版社、一九八一年十一月）、沈光耀氏『中國古代對外貿易史』（廣東人民出版社、一九八五年六月）等でも、主に寧波、泉州、廈門、廣州について觸れられている。

（22） 古くは彭雨新氏の『清代關稅制度』（湖北人民出版社、一

九五六年十二月）があるが、重點が置かれているのは、アヘン戦争後の海關である。

（23） 『玄覽堂叢書』第一・二輯。